

2021年 8月 5日

資料館通信 第79号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮 1-2-11 TEL 049-261-6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央 2-19-5 TEL 049-263-3111

令和3年度巡回平和展

「戦争の記憶」

上福岡歴史民俗資料館 7月17日～8月22日
大井郷土資料館 8月28日～9月20日

～戦時と平時の間で～

資料館では毎年、夏季に戦争と平和について考える企画展を行っています。今年度は、開戦から80年を数える年となりました。市内には、さまざまな戦争に関する「記憶」とをどめる資料が体験者・ご遺族や関係者の皆さんに引き継がれています。展示では、地域に遺された「戦争の記憶」をたどるとともに、当時を生きた青年が何を思い、何を考えていたか、日記からさぐります。戦争、平和の意味を考えるきっかけにいただければと考えています。

プロローグ・展示室ホールに入ると…

一階入口のホールに当時の衛生兵をイメージしたマネキンがお出迎えします。当時の兵士の装備をイメージしました。戦場では、爆撃や爆破などでよく物が燃え、直接毒ガスがまかれることがなくても有毒なガスやばい煙が舞うことが多く、ガスマスク（防毒面）をする場面も珍しくなかったようです。戦場での活躍と無事の帰還を願った寄せ書きの日章旗も展示しました。



略帽（軍属用）

防毒面

九八式軍衣
（ズボン含む）

昭五式水筒
（口号）
※一般兵用

医療用雑嚢

図嚢

ゲートル

水嚢（のう）、背嚢

下士官用図嚢
コンパス・筆記用具・メモ帳等を入れた

展示協力者一覧（順不同・敬称略）

神木繁行 神木洋寿 小室 豊
武井紀幸 立麻典子 富田信太郎
原田晴男 日出間洋司 吉野勝子
埼玉県護国神社 天神教会
ふじみ野市遺族会

各コーナーには、村の青年が記した日記を紹介しました。個人名はイニシャルで示しましたが、青年たちの率直な気持ちが伝わってきます。最初は太平洋戦争開戦と終戦の日の記事です。

青年たちの太平洋戦争 開戦と終戦の記録

【 H 青年の日記 】

昭和 16(1941) 年 12 月 8 日 (太平洋戦争開戦の日)

歴史的な今日の日である。畏くも英米に対し宣戦の詔勅渙発（天皇の意思を表明した文書を出すこと）せらる。今ぞ立つべし！

【 Y 青年の日記 】

昭和 20(1945) 年 8 月 15 日 (太平洋戦争終戦の日)

昼間日本は米英ソ支（アメリカ・イギリス・ソ連・中国）に降参したそうだ。昼の時間に聞いたのだが、自分たちは本気にしなかったが、夕方事実となってしまった。ああ思っても残念な事。これも致し方がない。停戦だ。

8 月 16 日

何と言ふことだ。仕事も手に付かずただなす事を知らぬ。（中略）ああ戦争なんてやらなければ良かったとしみじみ思ふ。戦争世界全人類は唯皆々幸福のために生き抜かうではありませんか。

1 兵役と軍事教練

（ 1 ）子どもの遊びと軍事教練

H 青年の日記・子どもの遊び 戦争ごっこ

昭和 15(1940) 年 1 月 9 日

福岡駅（上福岡駅）で可愛い兵隊さんに会ふ。これが S ちゃんであった。軍刀などつゝいておもちゃの兵隊の様だ。

11 月 3 日

明治の佳節。式からかへってきた Y は軍曹の肩章をつけて戦に出ていった。子供の戦争ゴッコである。往時を思ったりした。

明治治維新以後、日本は近代教育を取り入れ、国民全てに初等教育を行いました。学校でも外国に関することは教えられていましたが、子ども達としては、遊びの中で覚えることも多かったと思われます。

展示されている「世界一周双六」は、当時の外国の著名な観光地等、最先端の交通手段である旅客機による空の旅、豪華客船などを描いた先進的な内容です。

双六には1932（昭和7）年開催のアメリカ・ロサンゼルスオリンピックや、同年中国で日中両軍が戦火を交えた第一次上海事変、1936年から1939年まで戦われたスペイン内戦の勃発が記されるなど、激動する世界情勢も双六に反映されていました。

こうして自国以外にも世界がある事を教える一方で、富国強兵に基づく学校での軍事訓練は強化されていくことになります。特に戦争が本格化してからは、学校



はやまわり
世界早廻飛行教育双六

教育の中での軍事教練は厳しくなり、現役の将校が配属され指導にあたることもありました。

展示されている木銃と薙刀^{なぎなた}は当時の軍事教練指導の際に使われていたものでした。

(2) 兵役と軍事教練

① 徴兵制と法令

日本の徴兵制度は、明治3年11月13日（新暦1871年1月3日）に山縣有朋^{ありとも}の構想に基づく『徴兵規則』に端を発します。その後明治6(1874)年1月10日に『徴兵令』が施行され、何度かの全部改正を経て、昭和2(1927)年4月1日法令第47号『兵役法』が制定されます。

制定から一貫して日本国民、特に成年男子に対する兵役を国民の義務として課していますが、当初は反対運動や徴兵逃れが起こっていましたが、次第に兵役に就く国民の割合が増えるにしたがって、兵役に就かないことは不名誉なことと見なされるようになっていきました。

日本国民の兵役義務を定めた『兵役法』は日本敗戦により、昭和20(1945)年11月17日に廃止されました。戦後の新たな憲法下では、国民の義務としての兵役は引き継がれず、日本では徴兵制度は消滅しています。

② 出征と帰還

昭和12(1937)年7月7日の盧溝橋^{ろこうきょう}事件に始まり、昭和20(1945)年9月2日に連合国への降伏文書に調印で長い戦争は幕を閉じました。

日本本土が本格的に攻撃されるようになったのは昭和18(1943)年後半頃からでしたが、それ以前から、戦争が本格化、徴兵あるいは応召^{おうしょう}によって兵士は出征していきました。日中戦争から連合国へ降伏するまでの間、福岡村、大井村からは、約500人を超える国民が陸海軍兵士として、あるいは軍属として東西南北のあらゆる戦地に赴きました。出征・入営にあたっては、見送り等に配慮する行政文書が残されています。展示されているような旗が掲げられ、村を挙げて見送られ、戦死、戦病死をした者も村を挙げて弔われました。出征も無言の帰郷も等しく人々に敬意を払われていました。



福岡国民学校の木銃訓練



(上左) なぎなた

(下右) 木銃

H 青年の日記・出征兵士への惜別

昭和15(1940)年1月9日

カメラをかついでIと川越にゆく。S君の出征を荘にする旗を買ふためである。(中略 壮行会を開催) M君に始まった壮行の辞があまり悲壮だったので一同みんな感激に浸され 熱い涙が頬をぬらしたほどであった。俺も心の中で男なきに泣いた。なんと云ふ荘重な光景だったろう。

1月10日 S君を送った。駅頭は感激の旗の波だ。

11月30日

十時七分入営者の見送りにゆく。小学校のときの同窓生が今出て征くのである。窓から顔を出した可愛い兵隊がいる。こんな坊や連中がゲンコと忍従の三ヶ年を終へて立派な兵隊になると思ふと何か胸にこたへてくる。

(3) 除隊記念の盃

盃は、軍事的な祝い事のために特別に注文されたもので、少量飲むために直径5～7.5cmでつくられ、入営した際の贈り物、無事な帰還を祝うもののほか、兵役の満期除隊を祝うものなどがありました。旧日本軍の兵役は2年間（海軍は3年間）、満期で除隊する人は、師団の近くにある記念品をつくってくれる店に除隊記念の盃・盆などの記念品を注文して、知人や近所の方々に配りました。



除隊記念の盃



昭和18(1943)年

出征記念写真



昭和 13(1938) 年

上福岡駅での出征風景

2 ラジオと広がる世界

(1) 日本国民とラジオ

人類が電波で音声を届けることに成功したのは、今から 121 年前、西暦1900年のアメリカでの出来事でした。

日本でのラジオ放送の開始は、大正14(1925)年3月1日の社団法人東京放送局、現在のNHK東京ラジオ第一放送によるものです。太平洋戦争開始前までには一般家庭に広く普及するようになっていました。

今回展示しているラジオは昭和11(1936)年8月1日に開催されたベルリンオリンピックの時に販売されたオリンピックグッズの一つです。

このラジオは、激動の時代を伝えたと思われ、日本国民に終戦を伝えた昭和20(1945)年8月15日の玉音放送もこのスピーカーを通して流されたことが想像されます。

(2) ベルリンオリンピックと幻の1940年東京オリンピック

今から85年前の昭和11(1936)年8月1日に49の国と地域から、4,066人の選手が出場した第二次大戦前最後のベルリンオリンピックが開催されました。ラジオ受信機の普及によるオリンピック中継放送、初めての聖火リレーが行われるなど、後世のオリンピックに与えた影響は大きい先進的な大会でしたが、ナチス・ドイツによる大々的な宣伝活動の影響も色濃いオリンピックでもありました。

ベルリンオリンピックの次には、昭和15(1940)年の東京オリンピックが決定していましたが、翌年の日中戦争、3年後の第二次世界



出征ののぼり



昭和10年代前半
真空管ラジオ

大戦の勃発により、日本政府はオリンピック開催を返上することになります。緊張をはらみながらも開催されたベルリンオリンピックでしたが、そのわずか3年後には前回とは比較にならないほどの規模で、世界大戦に向かっていくことになりました。

H 青年の日記・H 青年が見た昭和15年の世界の流れ

昭和15(1940)年12月31日

阿部さんは汪さんと条約に調印するし、東西のリーダー日独伊は互に手をしっかりとにぎり会った。

大晦日の回想の記事。前年に第二次世界大戦は始まっており、阿部弘之元首相が代表となって、親日的な汪兆銘^{おうちょうめい}（中華民国南京政府主席代理）と11月30日に調印した日華基本条約と、日本・ドイツ・イタリアが9月27日に締結した日独伊三国同盟を新たな世界秩序の中心になるものとH青年は考えていたようです。

(3) ふじみ野市と福岡受信所

ベルリンオリンピックは、ラジオ中継とは別に、ふじみ野市にも大きな影響を与えました。当時、福岡村に置かれていた国際電気通信株式会社福岡通信所は、昭和11(1936)年7月にベルリンオリンピック向空中線整備を実施し、オリンピック開催にそなえて通信回線の整備を行いました。当時は国際通信を行えるほどの大規模な通信施設は国内に数えるほどしかなく、福岡通信所は通信設備を持った数少ない施設の一つでした。

ベルリンオリンピックを契機に整備された対ヨーロッパ方面向けの通信設備は、その後も増強が続き、太平洋戦争終戦に伴う通信禁止を経ても昭和30(1955)年頃まで国際無線通信網の一角を担うことになりました。

H 青年の日記・ラジオから流れる大本営発表

昭和18(1943)年2月1日

軍艦マーチをきく。レンネル島沖海戦に大戦果上る。戦艦二隻・巡（巡洋艦）三、それぞれ撃沈、戦一・巡一それぞれ中破、戦闘機三撃墜。尊し我が方の自爆機・未帰還機自爆七機、帰還らざる三機、ソロモンの海の鎮めの神とかし畏む

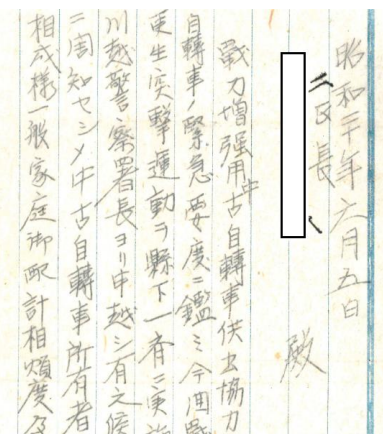
ガダルカナル島撤退作戦に伴って、昭和18年1月末に戦われた「レンネル島沖海戦」について、ニュースで流された大本営発表の戦果報告を記したものです。真珠湾攻撃以来の戦果と華々しく報道されましたが、アメリカ軍の実際の被害は、巡洋艦一隻撃沈、駆逐艦一隻大破でした。

3 大井村と福岡村の戦時

(1) 物不足と供出、総力戦の時代

第二次世界大戦は、人間や経済、軍事、国が持ちうる力のすべてを掛けて戦う国家総力戦の時代でした。戦争が始まってからは、戦力増強のためにあらゆる努力がはられていくことになります。日中戦争開戦後の昭和13(1938)年4月1日には国家総動員法が定められ、日本国の全ての人的・物資的資源を政府が統制運用できるように定められ、軍需用を満たすことを最優先とした体制が整えられました。物不足は終戦後も続きました。

金属類の回収については有名ですが、ふじみ野市に残された行政文書の中に、金属ではなく、軍隊用に自転車



昭和20年 自転車の供出を求める文書（玉井家文書）

の回収を指示した文書が残されています。

終戦後、一連の生産・経済活動を統制する法律は多くが廃止されることとなりましたが、食糧管理法（昭和17年2月12日制定、平成7年11月1日廃止）の様に、敗戦以後も長期間運用が続けられていた法律もありました。

生活に関わる物資の不足により、戦時に作られた軍服や軍用水筒、火工廠で使用された弾薬箱、陶製地雷の容器などが戦後も生活用品に転用され、今日まで地域に伝えられています。



自衛隊による不発弾処理の状況

（２）ふじみ野市を襲った空襲

ふじみ野市には、東京第一陸軍造兵廠川越製作所（通称火工廠）及び国際電気通信福岡通信所（現KDDI研究所）という重要な施設がありました。しかし、なぜか両施設に対するアメリカ軍の組織的な空襲は、最後まで行われませんでした。その理由については、当時の人々も不思議に思っていたそうです。

福岡村で、最初に空襲警報が発令されたのは、昭和17(1942)年4月18日の正午の東京初空襲のときでした。その様子は、福岡小学校（当時は国民学校）の日誌に記録されています。

組織的な空襲はありませんでしたが、護衛戦闘機による偶発的な機銃掃射は度々おこなわれ、昭和20(1945)年5月25日又は26日頃に、東武東上線の列車を狙い、線路沿いの農家に飛び込んだと伝えられている機銃弾が現在も残されています。

昭和20(1945)年4月24日に川崎市寺尾にB29爆撃機が墜落しました。昭和56(1981)年には、市内川崎で2発の250kg爆弾が発見され、自衛隊により不発弾として処理されました。

H青年の日記・山本五十六大将の戦死とH青年の職業観

昭和 18(1943) 年 5 月 22 日

連合艦隊司令長官山本五十六大将の戦死が発表された。

山本元帥それは実に偉大なる戦死であり一億に米英撃滅の決意を固めさせるに余りあるものである。

5 月 27 日

南進だ。（中略）一路この道を行く。無線技術の、いや通信技術の道を行く。斯界に大きな金字塔を立てるのだ。そして隆々たる基礎の上に立つのだ。学と家と。兄を扶け父を安んじ祖母、母を笑ましむる身は幸福である。

5 月 28 日

無線報国 長官の戦死 偉なる哉 元帥山本五十六 細心の注意を怠る勿れ 余裕を持って海軍連合艦隊司令長官山本五十六の戦死にH青年は衝撃を受けました。その死を契機に、南進して世界に無線技術を伝えること、無線技術の発展をもって日本に報い（無線報国）、家族の安寧を図ることが自らの使命と考えたと思われます。

4 陸軍造兵廠（火工廠）と福岡受信所

（１）集中する軍事施設とその転用

市内には、昭和2（1927）年から福岡受信所が設けられ、昭和12（1937）年から陸軍造兵廠（火工廠）が操業を開始しました。受信所内には無線受信の施設の他に海軍のレーダー設備を研究する施設もありました。その他に亀久保地区には造兵廠の大井倉庫が設けられるなど、当時のふじみ野市域は近隣の市町村に比べて身近なところに多くの軍事施設がありました。終戦後にこれらの施設に占領軍が進駐してきました。戦後になり、昭和22（1947）年に新制中学が

誕生しましたが校舎がありませんでしたので、福岡村は造兵廠技能者養成所の建物を、大井村は大井倉庫の建物を使用し、かつての軍事施設を新たな教育の場として活用することになりました。

(2) 海外からの引揚者と兵士の復員

終戦時、海外にいた日本人は民間人・兵士あわせて約 660 万人いたと言われます。福岡村では引揚者（帰国者）のうち約 400 人を、昭和 21(1946) 年 4 月から 9 月まで、旧造兵廠の建物（現在の上福岡五丁目にあった徴用工舎）を引揚寮（福岡寮）として受け入れました。その後も県の厚生課が担当して引揚者への支援が続けられました。また、福岡村・大井村から出征した兵士たちも連合軍に降伏して武装解除された後、故郷に次々と復員（帰国）しました。

(3) 婦人の街

昭和 23(1948) 年 9 月、旧火工廠内（現在の福岡二丁目）に「婦人の街」が開設されました。戦争で夫を失い、子どもを抱えながらも劣悪な生活環境に置かれた女性たちへの生活・就労の支援を行っていた財団法人翠光会を中心に、国・埼玉県・福岡村・福岡村婦人会などが協力して設立されました。居住者数や具体的な支援の状況、存続していた期間は不明です。



昭和 19(1944) 年
陸軍造兵廠川越製造所第二工場
爆発事故死亡者合同葬儀



昭和 18(1943) 年
福岡受信所敷地内
海軍電波兵器研究棟建設地鎮祭

5 祈りと戦没者の記憶

(1) 武運の祈願、戦勝の御礼

市内の神社には、出征や戦場に行く前に奉納された絵馬や奉納額などが残されています。軍隊に行く、出征することは生死に関わることでしたので神仏に無事を祈願したのでしょう。特に日露戦争の勝利への御礼として奉納された絵馬や額が多く残されています。出征兵士が戦利品として持ち帰って、神社に奉納した砲弾（火薬は抜いています。）も残されています。お守りや弾除けの効果があると信じられた千人針なども、戦場からの無事な帰還を祈願して兵士に贈られました。

(2) 戦没者の慰霊

日本は、明治 5(1872) 年に徴兵制を敷いてから、数々の戦争に関わり、多くの戦没者を出してきました。ふじみ野市内では、日清戦争（明治 27～28 年）では 1 名が、日露戦争（明治 37～38 年）では 12 名の戦没者が出ました。これ以降、兵器の発達や戦闘の拡大、長期化により戦没者は激増し、日中戦争・太平洋戦争（昭和 12～20 年）では 200 名を超える方々が戦没しました。



神社に奉納された軍人の拝み絵馬



大正 11(1922) 年 忠魂碑
大井小学校校庭



昭和 29(1954) 年 英霊碑
天神教会（市内西原）



昭和 31(1956) 年 英霊碑
下福岡共同墓地

明治 12(1879) 年、東京九段に靖国神社が設立（前身は東京招魂社^{しょうこん}）され、国家のために犠牲になった戦没者を神としてまつりました。埼玉県では昭和 9(1934) 年に埼玉県護国神社（さいたま市）が創建され、戦没者の慰霊が行われました。

（３）戦没者の村葬と慰霊

戦没者の村葬の様子を、当時の書類により確認することができます。戦死後、戦死の通知が村・家族に届けられます。戦没者の遺骨は上福岡駅で出迎えられ、村全体で執行された村葬では村長や各団体からの弔辞^{ちようじ}が捧げられました。戦争末期には、村や遺族に届く戦没の通知（「死亡告知書」など）も遅くなり、亡くなってから 2 年以上経過して届くこともありました。村の記録には「英霊帰還」「遺骨受領」とあり、告知書とともに遺骨が届けられました。

（４）忠魂碑の建立

埼玉県内では、戦没者の慰霊・顕彰のために日露戦争以降に多くの忠魂碑が建てられました。市内では、太平洋戦争前に、大井小学校校庭（大正 11＝1922 年）と福岡小学校校庭（年不詳）に忠魂碑が建立されました。福岡小学校にあった碑は、終戦後に廃棄されましたが、昭和 29（1954）年に近隣の天神教会に福岡村の英霊碑が建てられました。

下福岡共同墓地に英霊碑（昭和 31＝1956 年）、駒林八幡神社に表忠碑（昭和 8＝1933 年）従軍記念碑（昭和 50＝1975 年）があり、ふじみ野市遺族会や地域の人々により守られています。

（５）戦没者遺族と傷病者への援護

太平洋戦争終戦までは、戦没者・遺族や戦争による傷病者（いわゆる「傷痍軍人」^{しょうい}）に対して、軍人恩給などの国の制度的な保護があり、地域でも在郷軍人会による生活支援や戦没者の慰霊・顕彰が行われていました。

昭和 21(1946) 年 2 月、旧軍人への恩給と遺族への公務扶助料は廃止され、国・GHQ は県・市町村が戦没者の慰霊祭を行うことを反対しました。遺族や傷病者は経済的にも社会的にも厳しい状況に置かれました。昭和 22(1947) 年 11 月に「日本遺族厚生連盟」（後の日本遺族会）が発足して「全国 800 万遺族」への国家補償を掲げました。その運動の結果、昭和 27(1952) 年に戦傷者や遺族に年金を支給する「戦傷病者戦没者遺族等援護法」が施行されました。